

字本位文法と談話論

内 藤 正 子

1 中國語の文とは

中國語における字 (sinogram) 本位の言語理論を基に、文法に對する全體論を提示した徐通锵 (2008) は、その表達論 (expression) の中で、大小様々な句が入り交じる中國語の文を老舍の《骆驼祥子》の一節を取り上げて説明している¹⁾。

祥子の臉通红，手哆嗦着，拍出九十六块钱来：“我要这辆车！”铺主打算挤到个整数，说了不知多少话，把他的车拉出又拉进来，支开棚子，又放下，按按喇叭，每一个动作都伴着一大串最好的形容词；最后还在钢轮条上踢了两脚，“听听声儿吧，铃铛似的！拉去吧，你就是把车拉碎了，要是钢条软了一根，你拿回来，把它摔在我脸上！一百块，少一分咱们吹！”祥子把钱又数了一遍：“我要这辆车，九十六！”铺主知道是遇见了一个心眼的人，看看钱，看看祥子，叹了口气：“交个朋友，车算你的了；保六个月；除非你把大箱碰碎，我都白给修理；保单，拿着！”

興奮のあまり、祥子は顔を真っ赤にそめながら、ふるえる手で金九十六元也をテーブルにバンと置いた。「買った」店の主人は、なんとか百元まで出させようとして、しきりに車をほめたてた。車を店から出したり入れたり、幌を立てたりたたんだり、警音ラッパを鳴らしたり、その動作のひとつひとつに、最大限の形容詞つきである。最後には、車輪のスポークをポンポンと蹴って、こういったものだ。「音がちがいまさあ。鈴みてえでしょうが。車を引きつぶしたときに、こいつが一本でも曲がっていたら、車ごとあっしにぶつけてもようがすぜ。百元でいやだっ

てんなら、この話をご破算に願いましょ」祥子はなにもいわず、もう一度金を数えなおした。「九十六元。買った」思いこんだら梔子でも動かぬ相手と悟り、主人は金と祥子の顔を見くらべて、フウッと息を吐いた。「お前さんにゃ負けたよ。持ってきな。保証は六ヶ月。車體以外の修理は無料だよ。ほら、保証書」
 (杉本達夫譯『ラクダ祥子』²⁾)

まるまる三年かけて百元貯めた祥子が車屋に行き、いよいよ自分の車（人力車）を買おうとする場面である。徐の分析によれば、原文の段落は四つの文に分けられる。第一の文は、冒頭から、“我要这辆车！”まで。祥子が金を臺の上に叩きつけて「買った」と言う。第二の文は、“少一分咱们吹！”まで。これに對して店主がその車を出したり入れたり、ひとつひとつを動かして滔々と自慢する。第三の文は、“九十六！”まで。祥子が再び金を数えて「九十六元」と言いきる。そして最後の文では、店主が祥子の性格を見抜いて賣ることを承諾する、というように話は展開する。徐は、この四つの文を“大句”とし、それぞれが“小句”を含むとする。最も多くの小句を持つのは第二の文である。引用符で括られた部分、即ち“听听声儿吧”から“少一分咱们吹！”までの部分を一つの“小句”としても、九つの小句を含んでいる。

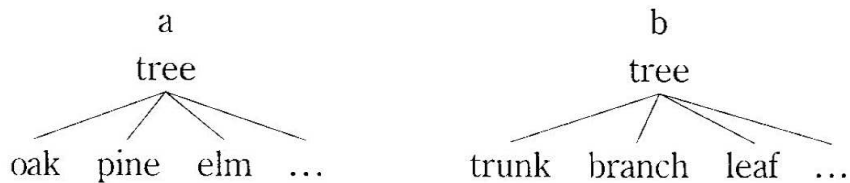
ここで徐が、小句、大句と言うのは傳統的にそれぞれ“读”“句”或いは“语气句”“语意句”と呼ばれるものである。“语气句”とは、言わんとすることが未だ終わらず語氣のとぎれのあるもの、“语意句”とは、意の完結したものと解釋される。徐はこのような文の分け方は全く中國語の實相に符合するとし、中國語の“句”の概念が西洋の sentence とは異なることを改めて喚起する。更に、“句”の分け方には明確な基準がなく、解釋には主觀性が大いに係わると指摘する。既に徐（2001）で、現代の多くの文法書が“妈妈很生气”といった簡単な文を對象とすることに疑問を呈し、もっと実際に見られる文、即ち幾つかの小句或いは語氣句から成る文を語氣の繋がりや語意の完成といった觀點から有機的に研究することの必要性を強調したことからして、徐（2008）の表達論がこのような提起で始まるのは至極當然とも言える。

本論は、徐の言う中國語の實際に即した文の分析を、その表達論を中心に考えるものである。それは上述の《骆驼祥子》の一節で明らかのように、談話レ

ベルを対象とするが、所謂語用論の中から発展した談話分析という枠組みにおいてではなく、むしろ字本位文法において情報の傳達と表現を捉え直すという試みである。

まずは、字本位理論が基本的構成単位とする“汉字”、特に“核心字 (core-sinogram)”の考え方について確認しておく必要があるだろう。字と字は組み合わせあって“字組 (sinographic group)”を構成するが、その際に重要な役割を果たすのが“核心字”である。二字から成る字組の場合、核心字が後ろに來ると、それは“义场 (semantic field)”を表し、前の字による限定や支配を受ける。前字は核心字の意味範囲を限定し、その抽象的な意味を具體化する。一方、核心字が前に來ると“义素 (semantic feature)”を表し、今度は後ろの字の意味範囲を限定し、字組としての意味の重點は後字に移る。この核心字を中心とする二つの構造の字組を、徐は“向心字組”及び“离心字組”と呼ぶ。この二つの構造は、ブルームフィールドの分布に基づく内心的 (endocentric) 及び外心的 (exocentric) 構造とは直接関係がない。むしろ、意味論的に解釋されるべきである。例えば、Halliday (1994) で示された圖 1 を思い起こしていただきたい。

圖 1



a の關係 (hyponymy) は、一般的な分類とその下位分類との間の關係である。Halliday はこのような一般的に認められた關係に更に b のような上位—下位關係 (meronymy) を加えた。そして、a の包攝關係と b の部分—全體關係には明確な境界はなく、ある a に屬する語は別の b に屬する語であり得ると指摘した³⁾。

この圖を中國語で表してみると、圖 2 のようになる。

圖 2



中國語で表しても兩者の關係は變わらない。“橡樹”が植物學的に“oak”と同一の木を指すかどうかということではなく、“橡樹”や“松樹”や“榆樹”といった木が、それぞれ總體的な木という概念を構成する一つであるという點において變わらないという意味である。bにおいても同様である。ただ、圖2を見ていると、aとb、それぞれの關係の中で“樹”の字が重複して使われていることに氣づく。圖2は、中國語に即して更に圖3のように示すことができる。

圖3

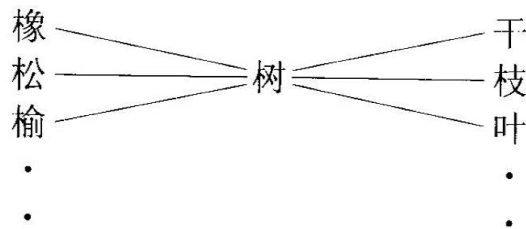
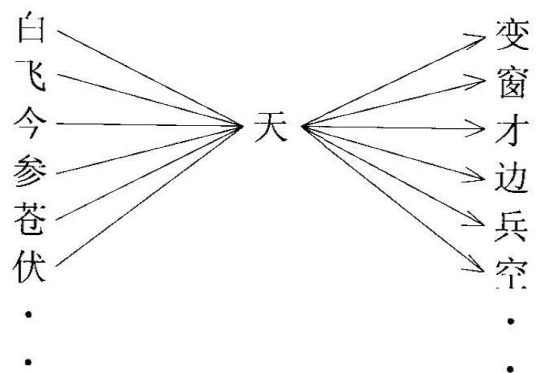


圖3は、圖2のaとbの關係を“樹”の字を中心にして左右に示したものである。英語のwordとは異なる、漢字一字の持つ“語”構成力を考えると、このように“樹”の字を中心として二字構造を捉えることは至極當然であり、これこそが徐の示す核心字の概念に他ならない。圖4は徐が示したものに基づき、その核心字の占める位置によって異なる二つの關係を筆者が付け加えたものである⁴⁾。

圖4



核心字	
义场	义素
(semantic field)	(semantic feature)
向心字组	离心字组

徐は、この核心字を基礎とする字組は開放的な構造であって、字義を結びつけることによりその構成要素を増やし、新しい字組を作ると説く。例えば、圖4のように“天”を核心字としてこれに“航”という字を組み合わせせて“航天（宇宙飛行）”という字組が作られたのはそう古いことではないと。更に、このような構成法によってできた字組は、同様の方法で順々により大きな字組を構成する。“天才”という字組は、向心構造によって“杰出天才”や“伟大天才”を、離心構造によって“天才科学家”や“天才军事战略家”という字組を構成していくのである。

核心字を基として字組を構成し、更に小句、大句へと生成していくさまを徐は、《文心雕龍》（章句第三十四）の中の一句“因字而生句”を以て表す。それは、文章のあるべき構成について論じた箇所、劉勰は“夫人之立言、因字而生句、积句而为章、积章而成篇”というように、最少単位の字から句へ、句から章へ、そして章から篇へと積み重ねていくことによって文章を作り上げることを述べる。字こそが中國文の基本的な構成単位であることは既に傳統的な語文研究に見られるということなのであろうが、それと同時に徐が強調するのは、文を完結させるには主觀的要素が大いに係わるということなのである。既に述べたように、傳統的に“读”“句”或いは“语气句”“语意句”によって文を區切るということは、同じ一段の文章でも人により解釋に違いが生じて、異なる“读”“句”で切ることがあり得よう。このことは古典の解釋だけでなく、現代文についても同様である。

曹逢甫（1980）は、臺灣師範大學の英語の上級クラスの18名を對象としたあるテストを紹介している。それは中國語と英語の文章を2題ずつ、合わせて4題用意し、學生に句讀點を付けさせるというものである。その結果は興味深いものとなった。まず中國語の二つの文章については、彼らがネイティブであるにもかかわらず、彼ら相互の間にもまた原作者との間にも、いずれにせよ中國語の一段の文章が幾つの文から成っているかについて、大きな不一致が見られた。文の句點が原文と同じだったのは、2題とも1名のみであった。それに比べて英文の方は、彼ら相互の間でもまた原作者との間でも、文の區切り方により多くの一致が見られた。原文と同じようにピリオドを打ったものは、一つの文章は8名、もう一つの文章は6名であった⁵⁾。彼らが、母語とする中國語

よりも學習言語である英語の文に對して遙かに原作者の句點に近いものを示したということは、英語習得の成果はさて措き、中國語の文とは何かという問いを改めて考えさせるものである。

2 “話題”と TOPIC

中國語の文における主觀性、即ち文構成における主觀的要素の本質的な係わりは、文の書き手と読み手との間だけでなく、その研究方法にも大きな影響を與える。中國人の思考法をメタファー思考と特徴づけ、その言語の基本的構成單位は“字”であるとする徐が、表達論において中國語の文の考察にまず「主語—述語」ではなく、「話題—陳述」という枠組みを設定するのも、中國語の文は本質的に構造ではなく表達の範疇に屬するものと考えるからに他ならない⁶⁾。中國語の文は、「話題—陳述」という枠組みで統括されるものであり、中國語の表述構造 (statement structure) とはこの枠組みの縮圖であると徐は説く⁷⁾。

さて、「話題—陳述」という概念であるが、今まで多く「主語—述語」との比較から議論されてきた。文の基本構造としての「主語—述語」に對して、それでは適切な分析ができない表現の場合に適用されてきた一つの手法であるが、各言語において同じ内容を持つものではない。「主語」の概念がそれぞれの言語によって一致しないのと同様に、「話題」も言語によって種々の内容を包含する。ここでは主に中國語の話題と英語の TOPIC を取り上げて考えてみよう。

主語と話題を類型論の觀點から考察した Li & Thompson (1976) が、主語顯著型 (subject-prominent) 言語と話題顯著型 (topic-prominent) 言語とを對比させ、前者の言語では文は「主語—述語」の文法關係によって述べられ、一方、後者の言語では文は「話題—陳述」によって述べられるとしたのは、「話題—陳述」の研究における大きな成果であった⁸⁾。Chafe (1976) は、眞の TOPIC とは、陳述が行われる枠組みを設定するものであり、英語の TOPIC も文頭に置かれるが、その役割は主に對比を際立たせること (focus of contrast) にあり、話題顯著型の言語のそれとは異なると指摘した⁹⁾。主語顯著型言語における TOPIC と話題顯著型言語における「話題」の概念がそもそも一致するもので

はないということをこの時点で巧みに言い得ていたことは特筆すべきである。

更に、Tsao (1979) は、主語顯著型言語と話題顯著型言語の區別を、文指向型 (sentence-oriented) 言語と談話指向型 (discourse-oriented) 言語と捉え、一つまたはそれ以上の節により共有される話題が形成するトピックチェーンこそが、中國語の談話分析における基本単位であると説明した¹⁰⁾。續いて Tsao (1990) では、この見解を更に深めた。それは次のように要約されよう¹¹⁾。

- 1 中國語において、話題と主語はどちらも重要な位置を占めているが、英語や他のインドヨーロッパ語では通常兩者を區別せず、その差異がそれほど重要ではないので混同される。
- 2 英語の文の定義はどのように表述しようとも、結局主語と限定動詞の範疇を用いることになる。
- 3 主語はシンタクスの概念であり、その管轄域は VP のノードを支配するものである。話題は談話の概念であり、その意味的管轄域は幾つかの節や文にまで擴大する。
- 4 話題と主語を同一の面において比較することは正しくないかもしれない。兩者の重複という現象が存在することは認めても、實質上、二つの範疇は文法組織の異なる平面に屬するものである。

Tsao (1979, 1990) が、中國語の文がそもそも英語の文とは異なるという根本的な觀點から「話題」の概念を捉えようとし、そしてそれが研究方法にも大きく係わるとする點は、前述の徐の觀點と相等しい。こうした著作が英文で著されたにもかかわらず、話題顯著型言語の研究結果が、主語顯著型言語の TOPIC 研究に反映されたとは言い難い。例えば、Trask (1993) は TOPIC を次のように定義する。

(also theme) That element of a sentence which is presented as already existing in the discourse and which the rest of the sentence (the comment) is in some sense 'about'. In English and in many other languages, the topic is most often realized as the grammatical subject in the unmarked case; the choice of a topic which is not the subject is usually accompanied by a marked construction of some kind.¹²⁾

TOPIC を明確に談話の概念とはせず、主語との本質的な違いにも言及していない。特に英語においては、TOPIC は主語の概念の中で扱われていて、むしろ冒頭で言うように THEME と同様に考えられていることがわかる。

THEME-RHEME もまた談話分析においてよく用いられる概念である。THEME とは通常文頭に置かれる語句の一まとまりとされている。文の残りの部分が RHEME である。THEME を文（節）の最初の語句とするのは、主に Halliday (1970)¹³⁾ による。J.Firbas や V.Mathesius 等のプラグ學派の立場では、談話は傳達情報量の程度の低い要素、THEME から始まり、程度の高い要素、RHEME で終わるが、程度の高い要素が文（節）の最初に来る場合もあるので、文（節）の最初の語句が THEME に相当するとは限らないとするが、ここでは論及しない。

Halliday が文頭、即ち語順に基づいて THEME を規定するのは、中國語の“話題”の概念に近く、實際、中國語を研究していた Halliday がそれを取り入れたのではないともいわれる。それはさて置き、英語において「主語—述語」以外に THEME と RHEME の概念が必要なのは、情報の傳達という觀點から文章の構造を考えるためである。即ち、情報の流れは通常、既知の情報→新情報となり、文頭に新情報は来ない。主語に既知の情報があり、述語（述部）に新情報を擔わせるという構造である。しかし、實際には、文頭に既知の情報ではなく新情報が来る場合がある。主語よりも前の語句が新情報を擔うということになる。このような情報傳達の流れを「主語—述語」の構造と合理的に結びつけるために次のように扱うことがある。

- 1 主語が THEME の時、文は既知の情報から始まる。
- 2 主語が THEME でない時、THEME には新情報がある。

上田 (1997) によれば、主語の前に例えば副詞句がある場合、この部分を THEME として扱うことには二つの意味がある。一つは主語の前に THEME という単位を置いて、これに別の新情報を擔わせることができる。もう一つは、同じパラグラフの幾つかの文の THEME に、類似或いは對照的な情報を置いて、内容的な繋がり、或いは對比を際立たせ、パラグラフにまとまりをもたせるという役割である。文頭の THEME は、時に視點の違いをはっきりさせ、轉換を際立たせるとも言う¹⁴⁾。前述の如く Chafe (1976) は、英語の

TOPIC の役割を focus of contrast としたが、對比や轉換の強調といった役割が THEME にも與えられていることがわかる。情報の流れを示す THEME の概念が文法構造を規定する「主語」のそれと適切に巧みに結びつけられているという点において、英語では TOPIC より、むしろ THEME の方が有用と言えるかもしれない¹⁵⁾。

ここで確認しておきたいことは、英語の TOPIC と中國語の“話題”とが本質的に異なるものだという点である。このことは「違いはあるが基本的に一致する」と考えるのではなく、むしろ本質的な違いが兩者の研究に大きく係わり、それぞれの研究を方向づけると考えるべきである。このことはまた、中國語の“話題”の研究が國外の他の研究者たちとも共有されているとは今日なお言い難い状況において、いくら強調しても強調しすぎることはない。

3 認知文法における TOPIC の分析

標記理論 (Markedness theory) に基づいた沈家煊 (1999) の話題の考察は、Tsao (1990) や徐烈炯、刘丹青 (1998)¹⁶⁾ 等に見られる中國語の話題研究の成果をプロトタイプの観点から捉え直したものである。沈は、中國語の話題の特徴を以下のように記述する¹⁷⁾。

- a. 文頭に置かれる：文頭>文頭の後で動詞の前>文末
- b. 後ろにポーズまたは語氣詞 (啊、吧、嘛、呢など) が置かれる：加えられる>加えるのは適當ではない>加えられない
- c. 定である；定>一般>不定
- d. 既知の情報である：既知の情報>對比的な既知情報>未知の情報
- e. 繼續的 (延伸的) である：繼續性が強い>繼續性が弱い>繼續性がない

これらの特徴を全て具えているものが“話題”の原型である。プロトタイプ性の度合いは右に進むにつれて弱まる。沈はこのプロトタイプにより、話題性を程度の違いと捉え、更に話題性そのものも主語の特徴の中に組み入れる。即ち、主語もプロトタイプとしてのカテゴリーとして捉え、その二つの特徴として、「施事」と「話題」を挙げ、プロトタイプ的な主語はこの二つの特徴を有すると説く。ある語が主語かそうではないか、という二者擇一式に考えるのではなく、二つの特徴の中どちらの程度が強いかということである。例えば、し

ばしば論争の対象となった文“台上坐着主席团”では、“台上”は話題ではあるが、施事ではない。もしこれを主語と定めるなら、それはプロトタイプ的ではない主語である。“主席团”は施事ではあるが、話題ではない。もしこれを主語とするなら、これもまたプロトタイプ的ではない主語である。

話題は語用や談話の概念であり、一方、主語はシンタックスにおいて分析されるものであるという、話題と主語とを異なるレベルの概念とすることについても、沈は再考を促す。“这个字小张不认识”の文において、文頭のNP（这个字）を“句法話題”とする考え方があるが、中國語では“小张不认识”という目的語が現れない文が自然であるのと同様に、“不认识这个字”という主語が現れない文もまた自然な文であるから、“小张不认识这个字”の文頭のNP（小张）も同様に“句法話題”と解釋できると。結局、“这个字小张不认识”の文頭の“这个字”を“大句法話題”、“小张”を“小句法話題”とすることができる。だとすれば、所謂“大主語”と“小主語”と呼んで兩者を區別するのとどこが異なるのかと。話題から主語への文法化の度合いの低い中國語においては、そもそもシンタックス、意味、語用の間に明確な境界を引くことはできない。それらは研究の便宜上のレベル分けにすぎないと沈は述べる。

機能主義的であり、同時に認知文法にも據る沈の、この話題についての見解には、しかし、今までの研究成果や今日なお續く議論を考えると些か疑問を抱かざるを得ない。“大主語”“小主語”と呼ぼうと、或いは“大句法話題”“小句法話題”と呼ぼうと、確かに用語の問題ではあるが、これらは中國語の文分析の中から考え出されたものであって、元來英文には必要ないものである。英語の構造においては、基本的に「主語—述語」が一対一で對應している。主語が二つ以上ということはない。ではなぜ中國語では二つあるのかという問題である。目的語は述語動詞に對應するものであるから、主語とは異なるレベルにあるとする一方で、文全體に係わる主語は二つまたはそれ以上あり得るのかという問題である。典型的な主語は同時に話題であると見なすことは、話題と主語とを分けるというより、主語の範疇の特徴として話題を組み入れることであり、主語のプロトタイプ性を判斷するのに話題の概念を用いるということである。主語や目的語が現れない文も中國語の文としては自然であると、沈自身も言及する。更に、話題は語用或いは表達のレベルの概念であるとも言う。では

なぜ英語とは文の構造が大きく異なる中国語の文の中で、英文の基本原則の主要な要素である主語と中国語の文の顕著な特徴である話題とを一つに、話題性を主語範疇の内包として把握しようとするのか。シンタックスと語用のレベルを厳密に分けて、主語と話題をそれぞれのレベルで扱う手法を支持しないという観点は理解できるものの、もっと根本的な問題がある。ここで、中国語の文とは何かという本論文の第一章で提起した問題に突き当たる。文の定義なしに話題の概念を把握することはできない。

刘林军 (2010) は、北京語 (Mandarin Chinese) の口語における話題を Langacker の認知文法に基づき分析したものである。話題の後のポーズ及びその語氣詞が、話題の標示及び言語化と如何に相關しているかをコーパスを基に調査した。ポーズの語氣詞とは、“呢”“吧”“嘛”“啊”等であり、この他に“~的话”“~来讲”も高頻率のトピックマーカーとする。刘は、用例の分析の中で話題と主語の概念を巧みに操作する。それは例えば次のようである¹⁸⁾。

啊，这个，我老伴儿呢，是，有血压高，心脏病。/他呢，是八三年，提前就离休了。/嗯，到现在他已经离，离休了两年多了。/反而从离休以后呢，/由于这个没有工作的压力了，/所以这个，身体呢，这个，恢复得还比较好。/他天天早晨出去去溜溜弯儿去。(/ は改行を示す)

この談話は、ある婦人が自分の夫について語ったものである。刘によれば、まず初めに話題は話し手を参照点とする所有表現“我老伴儿”として導入される。次の行では同じ指示対象は代名詞“他”にコード化される。その後にはポーズの語氣詞“呢”があり、それにより述語からは離れている。三行目になると“他”はもはや無標示なので、話題から主語へ轉じる。談話が展開するにつれて、指示対象は主観的に解釋される (subjectively construed) 存在となる。四行目の“离休”の文法的主語は非明示的であり、それは五行目の“没有”についても同様である。六行目の“身体”の所有者も隠されている。そして、この連続する三つの節において非明示的であった指示対象は、後續の文で再び代名詞“他”の形式にコード化され、主語として機能する。

各行に見られる NP を整理すると、“我老伴儿”は話題、“他” (二行目) は話

題、“他”（三行目）は主語、“身体”は話題、“他”（七行目）は主語ということになる。更に、七行目即ち最後の行の文頭の“他”に注目すべきであると刘は言う。既に話題となっている指示対象がここで再び明示されているのは、その前に言及された“他”から三つの節をおいて、そのことが話題としての有効性を減じるからだ。この場合、先行の節内の別の話題、“身体”による干渉が考えられるので、明示した方が文脈的に推理させるより良いだろうと刘は言うが、假に主語の“他”が明示されていないとして、果たしてこの文の解釋は困難だろうか。それが問題となるのは、むしろ英譯の文のように思われる。主語の概念を扱う以上、どうしても英語の構造に沿った分析になる傾向が生じることなのだろうか。このような話題と主語の概念の融合ともいべき観点は、介詞による有標の文法的な主語の設定にも現れている。

改めて言うまでもないが、認知文法の観点は話題と主語の両者の概念を區別するものである。主語は節レベルの構成體であり、一方、話題はシンタックスのレベルを超えた、明らかに談話現象であるとされている。尤も、傳統的な統語カテゴリーは認めても個々の単位の定義には、とりわけ文の定義には深く論及しないというのもその基本的な立場である。そもそも文レベルを中核とはしていないのである。刘自身も談話の最少単位は節（clause）であるとしながら、中國語において節は未だ十分に定義されていないと断った上で、動詞プラスその核心項（arguments）としている。文については、節の結合を重文または複文と分類するのみで、定義はしていない。實際、刘の用例には讀點（,）で終わっているものも多く見られ、談話を構成する単位としての節と文の區分は曖昧である。文法的に正しい理想的な文より、むしろ實際の發話や談話の事例に忠實であろうとすればするほど、中國語の文が英語とは異なる特徴を持つということが明らかになるはずである。中國語においては、そのような文を有機的に関連づける談話の大本の枠組みとして、「話題—陳述」は追究されるべきであると考えられる。

4 意合と順序の原則

主語と述語における文法上の一致や呼應という規則に制約されない、むしろその枠組みには本源的に主觀的要素が係わる、話題と陳述とは、互いに緩やか

に結びついている。そこに求められるのは意味上の調和であって、伝統的に意合法と呼ばれるものである。

インドヨーロッパ語の統語論が、主に“形合”の生成規則、語の品詞分類と文の構成成分との間の規律的關係等に關心を持ってきたのに對し、中國語の文は基本的に構造ではなく表現の範疇に屬するものとして、その研究の重點は生成規則よりむしろ主觀的要素の關與にあつたと總括する徐は、それを踏まえて、この意合を支配する原則は“前管后”または“上管下”であると言う。徐は、この觀念を启功 (1997) から得た。启によれば、“管”とは管轄する、統括する、制限する等の意だけでなく、貫く、影響する、作用する等の意も含む¹⁹⁾。前が後を (上が下を) 統括し、後は前を (下は上を) 承けるというのであるから、これはまずは表現の順序を言ったものである。启はまた、“縫”という概念を用いて倒置法とも區別する。例えば、漢譯佛典の最初によく見られる一句、“如是我聞”とは、“我聞如是”の倒置ではなく、“如是—我聞”であって、“如是”と“我聞”との間に“縫”があるのだと。启は、唐詩や古文を例として述べているが、それは Tai (1985) によって時間順序原則 (PTS) として現代語を例に檢證されたものと相通ずる²⁰⁾。PTS とは、二つのシンタクスの單位の相關的順序はそれらが概念領域においてあらかず状態の時間的順序により決定されるというもので、例えば、“我吃过饭、你再打电话给我”の最初の節における事柄の發生した時間は2番目の節におけるそれよりも前であるということを示す。英譯すると、その表現はこの順序に當てはまらない (Call me after I have finished the dinner)。Tai は、この原則によって中國語の語順を思考の流れと合致させつつ適切に解釋できると説くのである。

魯川 (2005) では、この考えを發展させつつ、象似性 (iconicity) より更に良く漢民族の認知モデルを體現できる理論として予想論 (Theory of preconceivedness) を提示した。情報の傳達もこれによって解釋されるとし、中國語の Q-A 文において、しばしば問いの文の話題が答えの文の話題になるという現象にも論及する。例えば、ある旅館の客がうっかりして廊下の磁器製の痰壺を割ってしまった。その旅館の従業員の女性はその事を社長に“18号房间的旅客踢破了走廊上的一个痰盂。”と報告しようとしていた。ところが、その矢先に社長から“走廊上那个痰盂怎么回事儿?”と聞かれてしまった。そこで従業員は、

“痰盂是 18 号房间的旅客踢破的。”と表現を變えて答えたという例を擧げて、次のように解説する。従業員が最初に用意していた文では、“痰盂 (痰壺)”の予想度は低く、解明への期待度は高いので文末焦點となっていたが、社長が質問するや、その文から彼女がまず聞いたのは“走廊上那个痰盂”であり、従って“痰盂”の予想度は突然上がった。彼女はとっさに、それ即ち社長の文の話題を自分の文でも話題にして適切に答えることができた。と同時に「18 號室の客」を文頭の話題の位置から後方に移して焦點とすることにより社長の疑問に答えたと説く²¹⁾。確かに、問いの文での話題を答えの文でも話題として受け継ぐことにより、情報の傳達は自然にスムーズに流れる。これも徐の言う“前管后”と符合する。

徐は、PTS は中國語の意味文法における重要な原則であって、話題の意味論的特徴が有生 (生物) であれば語句はこの原則によって生成され擴大されると、《红楼梦》第 64 回に見える次の描寫を例に擧げる。

这日宝玉清晨起来，梳洗已毕，冠带出来。至前厅院中，已有李贵等四五人在那里设下天地香烛，宝玉炷了香。行毕礼，奠茶焚纸后，便至宁府中宗祠祖先两处行毕礼，出至月台上，又朝上遥拜过贾母、贾政、王夫人等。

22)

寶玉の誕生日である。寶玉は早朝に起きて、髪を梳き顔を洗い、正装をして出て來た。前廳の中庭まで行くと、そこには既に李貴ら四、五人が天地卓、香、蠟燭の準備をしており、寶玉は香を焚いた。禮拜を終え、茶を供え紙を焚いた後、すぐに寧國邸内の御靈屋二カ所へ行って禮拜を済ませ、月臺に上がる…というように、寶玉の動作、行爲がその順序通りに述べられていく。一文は短く、一句ごとに一つの行爲が述べられる。後ろの句は前の句にぴったりと續き、句を構成する字の配列も PTS に基づく (“冠带出来”であって“出来冠带”ではない)。このような文の生成は開放的であり、順次に接続し、外に向かって生成と擴大を行うのであると徐は言い、このようなメカニズムこそ中國語の文の生成に特有のものであると言うのである。開放的という捉え方は、第一章で述べた核心字を基礎とする字組の構造と同様である。

更に、徐はこの一段の英譯を擧げて、英文の生成は内向きであり、主述構造の閉鎖的な枠内で語句の生成を完成させなければならないとする。ここではその英譯の引用を割愛し、また、原文との相違を論じることにも趣旨ではないので控えるが、一つ注意したいことがある。それは、英譯には主語を始め中國語の原文にはない語句がしばしば加えられているが、それについて徐が、このようなインドヨーロッパ語から見れば不完全な文こそ中國語の文であると言っていることである。例えば、原文の最初の文の二句目と三句目、“梳洗已毕，冠帶出来”、また第二の文の冒頭の句、“至前厅院中” いずれにも主語はない。しかし、これらの句に“宝玉”を添えたとしたならば、それはもはや中國語の習慣に合わない文であり、受け入れられないだろうと。要するに、形式上（構造上）缺けているからといって“補う”ことはできないということである。一般に主語の省略というが、補うことができないのであれば、それは元々缺けているものではない。中國語における省略とはこのような意を含んでいることに注意する必要があるだろう²³⁾。

省略、特に話題の省略について忘れてならないのは、廖秋忠 (1985) の「框(枠)と棧(格子)の関係」であろう²⁴⁾。廖は、談話の文中の二つの名詞性成分間の、個體—一部、全體—部分、情景—人物、道具等の関係を「枠」と「格子」の関係で捉え、その場合の「枠」の省略について考察した。そして話題について、枠が話題である場合、または話題が明らかに突出している場合は、枠は容易に省略され、枠が話題でない場合、または枠になり得るものが二つ併存している場合は、枠は容易には省略されないと述べた。話題が明確であって枠が一つであれば、それを後続の文にも照應させることができるので、話題は省略される。一方、枠と格子の関係が文頭にある時、枠は前を承けて省略されやすく、文頭は枠の省略に有利に働く。中國語では文頭は既知の情報が置かれる所であるから、この点からも話題は省略されやすいことになる。話題の支配する範囲を枠と格子という関係から明らかにし、それにより後続の文の話題の省略を合理的に導き出した。一つの文を見れば省略されているということだが、談話を対象にすれば、話題即ち枠の支配する範囲は一つの文を超えて段落へ、更に談話全體へと延伸するということであろう。Topic-NP deletion を、幾つかの節を貫くトピックチェーンの中で捉える Tsao (1990) も、最初の話題が後

續の話題の省略をコントロールすると考察する。省略もまた、“前管后”と符合する現象であることがわかる。

このような廖の研究は、Halliday and Hasan、van Dijk、Longacre、Brown and Yule 等七〇年代から八〇年代の西歐の談話分析の成果を十分に取り入れて、中國語の談話の研究を大きく進展させたことは疑う餘地がない。とはいえ、中國語の文の定義を論じなかったことはやはり惜しまれる。廖の言う“篇章”は discourse のことだが、それを「一回のコミュニケーションの過程において使われる完全な言語體。一般には一つの文より長く、話し手／作者と（潜在的な）聞き手／讀者に關連する。對話を含み、また獨白も含む。書面語を含み、また口語も含む」と定義する²⁵⁾。“篇章”を分析の對象とすることにより、あえてそれを構成する“句子”の定義には立ち入らないというスタンスであったのだろうか。確かに廖の用例は新聞や雑誌等、現代の書面語から集めた文章が多く、句點によって示される文の終わりは簡明である。そのような文を二つ以上持つという長さの特徴も前述の定義の通りである。しかし、中國語の談話研究が深化し細分化されるに従って、“句子”や“小句”等、文や節の定義の問題が顕在化してきたこともまた事實である²⁶⁾。本稿第一章の老舍《駱駝祥子》の一節を見れば明らかなように、中國語の文とは何か、表現の單位は何かという問題は、談話を對象としてもなお課題としてあると言えよう。徐の表達論は、表現論的文法の觀點から、それをはっきりと示したのである。

注

- 1) 徐通鏘《汉语字本位语法导论》(山东教育出版社、2008) 275 頁、384 頁。
- 2) 『杉本達夫、市川宏譯、世界文學全集 45 老舍 茅盾』(學習研究社、1978) 所收。
- 3) M.A.K.Halliday, *An Introduction to Functional Grammar*, London: Edward Arnold, 1994, p.332~333.
- 4) 徐通鏘《基础语言学教程》(北京大学出版社、2001) 206 頁。但し、徐の圖の一部を割愛してある。
- 5) 曹逢甫〈中英文的句子—某些基本语法差异的探讨〉、汤廷池、曹逢甫、李櫻編輯《一九七九年亚太地区语言教学研讨会论集》(台湾学生书局、1980) 所收。
- 6) 内藤正子『字本位理論とメタファー思考』(『中國文學研究』第 36 期、早稻田大學中國文學會、2010)。
- 7) 徐(2001)では、“話題—説明”という語が使われているが、ここでは徐(2008)に基づき、“話題—陳述”という語を使うことにする。

- 8) Charles N.Li and Sandra N.Thompson, Subject and topic: A new typology of language, in Charles N. Li (ed.), *Subject and Topic*, New York: Academic Press, 1976 では、subject-predicate, topic-comment という語が使われている。Li&Thompson, *Mandarin Chinese: A Functional Reference Grammar* (1981) の中国語譯では“主語—謂語”“主題—陳述”がそれぞれ使われているが、ここでは徐の用語に基づき“話題—陳述”という語を使うことにする。以下の他の文獻に言及する時も同様である。
- 9) Wallace L.Chafe, Givenness, contransitiveness, definiteness, subjects, topics, and point of view, in Li (ed.)(1976).
- 10) Tsao, Feng-Fu, *A Functional Study of Topic in Chinese: The First Step Toward Discourse Analysis*, Taipei: Student Book Co., 1979.
- 11) Tsao, Feng-Fu, *Sentence and Clause Structure in Chinese: A Functional Perspective*, Taipei: Student Book Co., 1990.
- 12) R.L.Trask, *A Dictionary of Grammatical Terms in Linguistics*, New York: Routledge, 1993.
- 13) Halliday, Language structure and language Function, in John Lyons (ed.), *New Horizons in Linguistics*, Harmondsworth: Penguin Books, 1970.
- 14) 上田明子『英語の發想』(岩波書店、1997)。文頭にくる要素をシームとするが、但し、「順序を表す表現」「接續詞・接續を表す副詞(句)など」「筆者の判断を表す語句」などは文の最初に来てもシームとはしない。これらは書かれた内容より、一段高い位置で、或いは内容と関わりを持ちながらも、内容に對する方向づけというレベルの違った指示をしているからである。
- 15) 王福祥《話語語言學概論》(外語教學與研究出版社、1994)は、シームとリームを、それぞれ“主題”“述題”と譯して談話分析を行っている。但し、兩者の分け方には、ポーズ等の觀點から實際の中國語としてはやや不自然な所が見られる。
- 16) 徐烈炯、刘丹青《話題的結構與功能》(上海教育出版社、1998)。
- 17) 沈家煊《不對稱和標記論》(江西教育出版社、1999)。
- 18) 刘林军《北京話口語中話題結構的功能認知研究》
A Cognitive-Functional Approach to Topic-Constructions in Beijing Mandarin (中國社會科學出版社、2010) 129 ~ 131 頁。例文の下線は原文のままである。
- 19) 启功〈有关文言文中的一些现象、困难和设想〉(《汉语现象论丛》、中華書局、1997、24 ~ 53 頁)。なお、この論文の初出は《北京師範大學學報》第二期 (1985) である。
- 20) Tai, James. Temporal sequences and Chinese word order, *Typological Studies in Language*, Vol.6, 1985.
- 21) 鲁川〈“预想論”：現代漢語順序的認知研究〉(《世界漢語教學》2005 年第 1 期)。例文中の下線は原文のままである。予想論については、鲁川、王玉菊《漢字信息語法學》(山東教育出版社、2008) にも詳しい。
- 22) 徐 (2008) 386 頁。
- 23) 吕叔湘〈漢語句法的靈活性〉(《中國語言》1986 年第 1 期) では、一種類の語句によって補填されるのでなければ省略とは言えないとし、構造上足りない成分があっても、實際にはその成分は現れないというのであれば、それは“隱含”であ

- るとする。これによれば、徐の言う省略も“隱含”に入るかもしれない。
- 24) 廖秋忠〈篇章中的框—榘关系与所指的确定〉(《语法研究和探索》三、1985)。
- 25) 廖秋忠〈现代汉语中动词的支配成分的省略〉(《中国语文》、1984年第4期)、〈篇章与语用和句法研究〉(《语言教学与研究》、1991年第4期)。
- 26) Chu, C., *A Discourse Analysis of Mandarin Chinese*, New York: Peter Lang, 1998. 徐超超《现代汉语篇章回指研究》(中国社会科学出版社、2003)。

Author: Naito Masako

Title: The Sinogram-based Chinese Grammar and its Exploration of Discourse

Summary: This paper discusses the approaches to studying expression in the framework of the Sinogram-based theory, which are mainly revealed in the Chinese grammar book *Hanyu Zibenwei Yufa Daolun* by XU Tong-qiang. There are several points of argument to be noticed. Most fundamental one is the definition of sentence in Chinese language. Although it has been discussed for a long time in the many fields of Chinese language study, yet it is a difficult argument to deal with. By contrasting their basic structural units, Xu differentiates the sentence in the Chinese language and the sentence in the Indo-European languages. And he indicates that the topic-comment framework is appropriate for the former, while the subject-predicate framework for the latter. Based on these notions, he presents the discourse in Chinese as the expression which is written under the sequence of the events from the subjective point of view. Examining the concepts of “huati” in the Chinese language and “topic” in the English language, we have found that the definition of sentence is important and needed not only for syntax but for studying discourse in the Chinese language.

Keywords: Sinogram-based theory, expression, discourse, topic-comment, semotactic relations